

平成30年度看護教育指導者研修（ベーシックコース）を受講して

（地方独立行政法人京都市立病院機構京都市立病院 看護部）

菅沼 千晶

要 旨

患者の高齢化や在院日数の短縮化など医療や看護を取り巻く環境の変化，患者の権利意識の高まりを受け，看護職に対する社会の需要は年々高くなっている．その中で，看護学生への教育の在り方やそれを受け入れる臨地実習施設における教育体制の整備が必要とされている．社会が求める次世代の看護職を養成する指導者の育成が必要とされており，全職員が新人看護職員に関心を持ち，皆で育てる組織文化の構築が重要である．
（京市病紀 2019；39(1)：38-40）

Key words：教育，実習，組織文化

はじめに

看護学生を指導する上で，まずは現在行われている看護学教育の実際と看護学生の実践能力を評価する視点を理解する必要がある．また看護学教育における臨地実習の位置づけや目的，実習指導の基本について理解した上で指導を進めていかなければならない．そのためには，看護学生を取り巻く医療情勢や，教育の課題を明らかにする必要がある．看護高等教育行政や政策を知り理解することは，今後必要とされている看護職のあり方を知り，育成する目標となる．今回の研修は，臨地実習を受け入れる施設が上記の内容を理解し必要とされる人材育成を行う上での指標を明確にし，それをを行う指導者の育成を目標としている．実際自分が受けていた実習と今現在病棟で行っている実習は明らかに違い戸惑う場面もある．そのような中で，今回の研修を受け臨地実習や，看護教育について改めて学ぶ機会を得ることができ課題を抽出することができた．その中で看護学生の延長線上にある新人看護職員への教育に活かすことが出来るのではないかと考え，取組を行ったので報告する．

研修期間

2018年8月22日（水）から8月24日（金） 3日間

看護学教育指導者研修（ベーシックコース）を受講しての学び

病棟で新人看護職員を教育する立場となり，指導を進める上での困難感を年々感じるようになっていた．また，臨地実習指導を行う上で，看護学生の学習の理解度や目標達成に向けた取組み方法など学生指導者は継続して理解できているが，勤務交代をしながら指導する病棟スタッフへこれらの周知が十分にできておらず，指導を行った日は目標達成度の把握はできるが，実習期間を通して自身の指導がどのように活かされ学生の学びにつながって行ったのか指導上の達成感を感じる事が少ないように思っていた．しかし自身を振り返ってみると，教育や臨地実習について，現在の看護学教育に対する知識が不足しており，教育についての明確なビジョンも持っていな

いと感じていた．自分の指導が相手に伝わるにはどうしたらいいのか，経験を教材として活用するための視点や方法を今回の研修を受け学ぶことができた．その上で，新人看護師が抱えるリアリティショックが和らげられ，看護学生から看護師へと成長する上で，実習を通しての学びから社会人基礎力を評価することで，看護師として働き始める中で自身の傾向と伸ばすべき力を早期に明らかにし，自身で課題を見出し行動につなげて行くことが必要ではないかと考えた．

平成30年8月22日から24日に，千葉大学大学院看護研究科にて行われた看護学教育指導者研修に参加した．今回の研修は，北海道から鹿児島まで全国から38名が参加していた．看護学教育における臨地実習の位置付けや目的，指導上の課題，臨地実習体験を教材として活用するための視点と方法を学ぶものであった．

まず看護学高等教育行政の動向についての講義があった．現在文部科学省では，2040年に向けて社会情勢を含めた高等教育についての議論がなされている．2040年には，18歳人口は88万人，大学進学者は約51万人と現在の80%の規模に縮小してしまうとされている．そのため一旦社会に出た後に，もう一度学び直す社会人を含めた，多様で質の高い教育プログラムが必要と考えられており，教育の質の保証が強く求められている．2040年の日本の社会において，すべての人が必要な教育を受け，その能力を最大限に発揮でき，平和と豊かさを享受できることを目標とし審議されている．そのような中で，看護師学校，養成所の入学定員は年々増加し，まだまだ増えていくことが予測されている．特に看護系大学の中でも私立大学が増えてきているが，看護系大学の急増に伴い教育水準の維持向上が課題となっている．看護師として必要となる能力を備えた質の高い人材養成を行い，看護師養成教育の充実と社会に対する質の補償に対応するため，各大学が新たに作成したカリキュラムが，今年の4月から開始される予定となっている．

そのような社会情勢の中で，当院が実習先に選ばれていることは，施設設備はもちろんであるが，人材育成やチーム医療に必要な知識や技能，態度など学習できる施

設であると評価されているからだと改めて考えることが出来た。各大学が求める教育目標を理解し、臨地実習の場で目標が達成できるようにするために指導者としての役割を考え、指導内容の充実を図る必要性があることを痛感した。また、実習を受け入れるメリットとして、①病棟看護の課題の明確化、②自部署のケアの質的向上、③看護とは何かについて一緒に考えることでスタッフが成長できる、④指導体験を通しての学習やキャリアアップ、⑤仕事へのやりがい、⑥重要な患者の情報源、⑦人材確保の場となることなどが挙げられる。これらのことをスタッフへ伝え、実感できるような学生との関わりができるよう環境の整備が必要と考えた。

受け入れ前に実習、指導体制の環境として、実習目標、学習の進め方、学生のレディネス、教員と臨地指導者の役割分担について情報共有と浸透が必要である。その上で課題として、①実習前の目標、目的の周知と各学校が目指す教育理念と理解、②学生情報の共有、③学習のゴールをお互いにイメージできる、④教育について継続した取り組みの構築、⑤学生のロールモデルとなれるよう意識を持つ、⑥組織文化の伝承であると考えた。

これは、病棟での新人看護師の教育にもつながるのではないかと思ひ、病棟スタッフへの意識調査をアンケート方式で行った。27名中23名の回答があり回収率は85%であった。アンケートの内容を抜粋すると、看護学生がどこの大学の所属かを知っているかは、100%のスタッフが把握出来ていた。実習目標や目的を知っているのは、47%と低く、担当患者や学生の名前を知っているスタッフは52%であった。病棟における新人教育について調べてみると、指導の進捗状況を知っているスタッフは15%、毎月実施されている教育カンファレンスのノートを見ているスタッフは27%という結果であった。アンケート内容からは、スタッフの日々の学生指導や新人教育への関心が低い傾向がみられた。

また同時に1、2年目のスタッフへもアンケートを実施した。その内容は、学生時代に実習先で困ったこと、看

護師として就職してから困ったことを自由記載とした。その結果①看護技術の不確かさ、②コミュニケーション能力の不足、③メンタル面の弱さ、④専門職としての自覚の低さが抽出された。部署での新人教育と照らし合わせてみると、学生と新人看護師は共通項が多いことが明らかとなった。

実際病棟での新人看護師の指導の中で、学生から社会人として歩み始める上で、職業としての責任や看護技術や知識の未熟さを実感するなど、リアリティショックが大きくなかなか乗り越えることが困難なケースを見てきた。そこで、入職して早い段階で看護実践を通しての、自身の振り返りを客観的に自己評価することが重要ではないかと考えた。自身の目指す将来の姿を明確にしておくことは、困難を乗り越える力になるのではないか。またその内容は、新人教育を進める上での資料として活用できるのではないかと考え、社会人基礎力のチェックシートをもとにした以下のような評価シートを作成した。

- ① 実習を通しての自己評価
- ② 自己の目指す将来の姿を明確にする
- ③ 結果をもとに、入職後の教育方針の検討

これらを明らかにし、入職後のリアリティショックを軽減できるよう、今年度3A病棟に配属される新人看護師に使用し、活用していきたい。

終わりに

今回看護学教育指導者研修に参加したことで、教育とは何かを考え、臨地実習のあり方と受け入れる施設としての課題を明確にすることが出来た。その上で、新人看護師への教育方法への取り組みの一つを考える機会を得たことにより、今後の私自身の課題をも導き出すことができた。今後も継続して看護教育について取り組んでいきたい。最後にこの研修を受講する貴重な機会を与えてくださり心から感謝いたします。

Abstract

Report on the Participation in the 2018 Leader Training Course for Nursing Education (Basic Course)

Chiaki Suganuma

Department of Nursing, Kyoto City Hospital

The social demand for more nurses is increasing year by year due to the change in the medical and nursing environment, such as the increase in the number of patients advanced in age and shortened length of hospital stay, and due to the increase in awareness of patient's rights. Under this situation, the educational system for nursing students at the facilities for practice needs to be developed. Leaders to nurture the next generation nurses need to be trained. Furthermore, it is important that all staff have concern of the new nurses and construct the organizational culture for their education.

(J Kyoto City Hosp 2019; 39(1):38-40)

Key words: Education, Practice, Organizational culture